

活動報告**フランス人による落語口演**

Marco SOTTILE

2017年12月9日（土）、国際コミュニケーション学部による「フランス人による落語口演」が昨年に引き続き開催されました。

このイベントは国際コミュニケーション学部の Marco SOTTILE が仲立ちとなり、日仏の文化交流の促進を目的に開催されました。COOL JAPAN の文化交流の具体例として、日本在住フランス人の落語パフォーマー Cyril COPPINI 氏とフランスから来日したアーティスト Sandrine GARBUGLIA（演出家）と Stéphane FERRANDEZ 氏（語り部）による日本語とフランス語の落語口演が行われました。

COPPINI 氏はアンスティチュ・フランセ日本（フランス政府が管理・運営するフランス文化センター）に勤める傍ら、上座落語家の林家染太の指導を受けながら、バイリンガル（フランス語と日本語）落語に挑戦し、落語の魅力を世界に発信しています。2011年に開催された「落語国際大会イン千葉」に出場し、3位を獲得しました。外国語で落語を演じる三遊亭竜楽のフランス口演のコーディネーターや通訳で同行し、落語の海外普及にも積極的です。2014年7月に世界最大演劇祭「アヴィニョン演劇祭」で遊亭竜楽と林家染太と口演を行いました。落語をテーマにした漫画『どうらく息子』（小学館刊）のフランス語版も担当しています。

演出家の GARBUGLIA 氏と語り部の FERRANDEZ 氏は2007年に日本文化に触れたくて、はじめて東京と大阪を旅し、初めて落語に触れ、しゃべり方、扇子、手ぬぐいを使ったしぐさに惹かれました。両氏が帰国して本格的に落語について学ぼうと決めました。2009年に研究員として「京都ヴィラ九条山」に一年間の滞在し、快楽亭・ブラック（1858 - 1923年）の研究の傍に日本の落語家から落語を学びました。2010年に「Histoires tombées d'un éventail」（扇子から落ちた話）という口演を開催してから、着物を着て日本での経験を元にしたフランス語落語をフランス語圏の国で披露しています。2011年より、日本でも知られている「ジャパン・エキスポ」（パリ・マルセイユ・ベルギー）に出演し、パリの日本文化会館で落語のワークショップを開催しました。2012年3月に日本国内（京都・大阪・名古屋・東京・仙台・福岡）でもツアーを開催し、2013年の3月に再度に来日し、全国各地でフランス語落語も行いました。2014年7月にはヨーロッパ最大の演劇フェスティバル「ア

ヴィニョン演劇祭」で、日本人の落語家の三遊亭竜楽と林家染太と共演しました。2014年9月～2015年1月までパリの伝統的な会場「Théâtre du Gymnase」とオランジュリー美術館で週一落語会も開催しました。

イベントでは、前座として本学落語研究会の学生（梶山亭くるみ）が落語を口演しました。そして、COPPINI氏が日本語口演でフランス版「寿限無」(Je t'aime, je t'aime)を、また、FERRANDEZ氏が日本語字幕付きのフランス語口演でフランス・ブルターニュ地方の民話を題材にした噺などを披露しました。また、質疑応答では、「死神」のような噺の内容が明治時代に日本で広まったグリム童話が元になっていることや、東京（下方落語）と大阪（上方落語）では同じ内容の噺でも地域に馴染むように登場する食材やタイトルが変わってくる（例えば、上方落語の「時うどん」は下方落語では「時そば」になる）など、文化が国や地域を越えて利用され、形を変えて根付いていく話も飛び出し、文化の諸相について理解を深める機会ともなりました。

